



ニュースレター 2015年7月～9月 (ぼんぼん時計 No.49)



ピックアップニュース

- ①ドイツ大学長会議と日本の大学協会 3 団体が協定に調印
- ②連邦政府がイノベーションのための記録的投資を決定
- ③ドイツ研究振興協会 (DFG) が「ファンディング・アトラス 2015」を発表

その他のニュース

トピックス イベント報告

- ①第 16 回ドイツ語圏日本研究者会議に参加
- ②浅島理事がドイツ対応機関を訪問
- ③日本語研究者ネットワーク (JR-Net) 連絡会議を開催
- ④年次活動報告会 JSPS Abend を開催

今後のイベント

センター長コラム

ドイツの大学紹介:ミュンヘン大学

ピックアップニュース

ドイツ大学長会議と日本の大学協会 3 団体が協定に調印

6月26日東京において、ドイツ大学長会議 (HRK) と日本のパートナー機関である国立大学協会 (JANU)、公立大学協会 (JAPU) 及び日本私立大学団体連合会 (FJPCUA) が、大学間協力のための協定調印を行った。協定は、両国の大学間における協力や交流、学位資格の認定、学生や博士学生の入学等について提言している。

これに関して、HRK 会長は概ね次のように述べた。「新しい協定は両国の更なる大学間協力を促進するだろう。日本、ドイツとも、大学の国際化はますます進行しており、特に研究分野における協力は非常に活発で成果を生んでいる。他方で、デュアル・ディグリーにつながる共同教育課程や博士課程プログラムについては、さらに協力を進められる余地が多く残されている。」

HRK: <http://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/agreement-signed-on-german-japanese-cooperation-3773/> (29 Jun. 2015)

連邦政府がイノベーションのための記録的投資を決定

2015年、連邦政府は研究と開発のため総額 149 億ユーロを支援することとした。前年比約 2 億 6,100 万ユーロの増額で、2005 年と比較すると 65% 増となっている。

連邦教育研究省 (BMBF) は、研究と開発のための支援費用を、2005 年と比較して 72% 上昇させ、現在までに 88 億ユーロに増額した。

連邦政府はこの資金によって、将来における社会、経済成長及び繁栄にとって特に重要な研究テーマである、例えば、デジタル経済・社会、持続的な経済とエネルギー、革新的な労働環境、健康的な生活、インテリジェント・モビリティ及び国民の安全等に係る研究を助成する。

BMBF: <https://www.bmbf.de/de/rekordinvestitionen-in-innovationen-115.html> (30 Jun. 2015)

ドイツ研究振興協会 (DFG) が「ファンディング・アトラス 2015」を発表



(DFG ホームページより)

ドイツ研究振興協会(DFG)は、1997年以降3年ごとに発行している「ファンディング・アトラス 2015—ドイツで公的助成を受けた研究に関する指数」を発表した。

このファンディング・アトラスが創刊された当初は、助成金を多く受けている大学ランキングにすぎなかったが、現在のアトラスがカバーしているデータやテーマ等は大きく拡大しており、ドイツの先端研究の成果を詳細に取り上げている。

中でも、エクセレンス・イニシアティブの助成を受けた大学・研究機関が、研究力が高く、魅力的であることが明らかになった。

また、2011年から2013年にかけて、助成を受けている大学ランキングに変化が見られた。1997年以降のランキングでは、ミュンヘン大学の次に常にアーヘン工科大学が続いていたが、今回はミュンヘン大学に続いてハイデルベルク大学が2位につけ、続いてアーヘン工科大学、ミュンヘン工科大学、ベルリン自由大学、ゲッティンゲン大学、フライブルク大学、カールスルーエ工科大学、ベルリン・フンボルト大学、ドレスデン工科大学等が上位にランクインしている。

なお、大学における外部資金の重要性はますます増加しており、2012年にはドイツの大学は総額175億ユーロの運営費交付金に加え、68億ユーロの外部資金を獲得している。

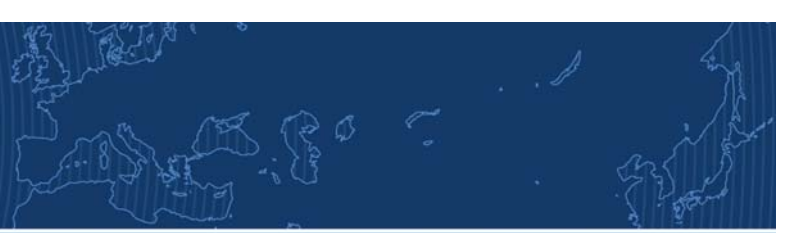
ドイツ大学長会議(HRK)リュウディガー副会長は、ファンディング・アトラスのデータによって、エクセレンス・イニシアティブが科学研究及び地域連携に貢献していることが明らかになったことは評価するが、基盤的経費が削減された結果、外部資金獲得のために研究者の負担が増えていることに対して懸念を表明した。

DFG:

http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2015/pressemitteilung_nr_43/index.html

(3 Sep. 2015)

HRK: <http://www.hrk.de/presse/pressemitteilungen/pressemitteilung/meldung/hrk-vizepraesident-ruediger-zum-neuen-forschungsfoerderatlas-erfreuliches-zur-exzellenzinitiative/> (3 Sep. 2015)



その他のニュース

ドイツ研究振興協会 (DFG) 会長を再任

ドイツ中世研究者であるペーター・シュトロ・シュナイダー教授が、7月1日ボーフムで開催されたドイツ研究振興協会(DFG)会員総会において、会長に再選された。2期目は2016年1月にスタートし、任期は4年であるため、2019年12月までとなる。

DFG: http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2015/pressemitteilung_nr_29/index.html
(1 Jul. 2015)

ドイツ研究振興協会(DFG)が「エクセレンス拠点」の設立を提案

ドイツ研究振興協会(DFG)は大学の運営費交付金の顕著な増額、戦略的な先端研究の助成及び若手研究者の就職状況の改善が、ドイツの学術政策において最重要課題であるとし、エクセレンス・イニシアティブをさらに発展させた新しい助成措置として「エクセレンス拠点」の設立を提案している。これは、ドイツの大学を特定の研究領域において、世界の先端研究拠点に発展させようというものである。

このため、大学をさらに重点化し、関連する全ての専門知識を一箇所に結集させ、個々の機関を越えた連携を進めるための取組みを要請した。

DFG: http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2015/pressemitteilung_nr_33/index.html
(2 Jul. 2015)

ケーテ・ハンブルガー・コレーク(Käte Hamburger Kollegs)によって人文科学分野を強化

連邦教育研究省(BMBF)は、人文科学分野を助成するため、2007年ケーテ・ハンブルガー・コレーク(Käte Hamburger Kollegs)[※]プログラムを開始し、ドイツの大学から10大学を採択し、総額1億900万ユーロを助成した。

助成を受けている10大学のうち、エアランゲン・ニュルンベルク、ベルリン、ケルン及びミュンヘン大学における人文科学の先端研究が、国際的な評価委員会により肯定的な評価を受け、さらに継続して6年間助成を受けることとなった。

BMBF: <https://www.bmbf.de/de/kaete-hamburger-kollegs-staerken-die-geisteswissenschaften-100.html>
(10 Jul. 2015)

※Käte Hamburger Kollegs: <http://www.kaete-hamburger-kollegs.de/index.php>

ドイツの留学生数が30万人に到達

2014年、ドイツの留学生数が過去最高を記録し、前年に比べ19,000人多い30万1,350人が入学した。特に修士課程への留学生数は、2008年の3倍以上となり、現在約67,000人の留学生が在籍している。2020年までにドイツの大学で35万人の留学生を獲得するという政府の目標は、ほぼ確実に達成されると予想されている。

留学生増加の一因として、ポローニャ・プロセスによって、外国で取得した単位認定が容易になったことが指摘されている。

ドイツの大学が国際化する一方で、ドイツ社会に馴染めない留学生も多く、ドイツ人学生との交流が少ないという結果も出ている。ドイツ語習得等のドイツ社会に馴染むためのサポートが今後の課題である。

BMBF: <https://www.bmbf.de/de/erstmal-ueber-300-000-auslaendische-studierende-in-deutschland-956.html>
(22 Jul. 2015)

ドイツ人は雇用促進のための原動力として科学を推進

ドイツにおける科学と一般市民との交流・対話を促進するための NPO 法人“Wissenschaft im Dialog(「対話する科学」)”が行った調査「科学バロメーター2015」によると、ドイツ人の多くが、科学が経済に役立つと考えていることが明らかになった。

調査によると、回答者の 56%が、基礎研究に投資することは雇用創出に最もよい方法の一つだと答えており、78%が研究者にとって産学連携は有益であると回答している。また、科学研究費は安定して補助されるべきであり、国家予算が縮小しようとも減らされるべきではないと回答した市民が 52%に上った。

BMBF: <https://www.bmbf.de/de/deutsche-halten-wissenschaft-fuer-einen-jobmotor-1048.html> (28 Jul. 2015)

Wissenschaft im Dialog: <http://www.wissenschaft-im-dialog.de/>

科学バロメーター2015: <http://www.wissenschaft-im-dialog.de/projekte/wissenschaftsbarometer/>

改正連邦教育促進法(BAföG)の施行により奨学金の上限額を緩和

8月1日から、改正された連邦教育促進法(BAföG)が施行された。これまで月額最高 360 ユーロであった奨学金が、今後は個々の学生の状況によって金額が決められることになった。さらに、学士課程から修士課程への移行期間の奨学金受取りを簡素化した。また、連邦政府が奨学金を全額負担することになり、これにより州政府の負担が年間 12 億ユーロ軽減される。軽減された資金は、州内にある大学に配分される予定である。

なお、2016年の夏には学生の収入に対する控除額やその他手当てに関して増額が予定されている。

BMBF: <https://www.bmbf.de/de/bafoeg-erleichterungen-ab-august-455.html> (30 Jul. 2015)

財政危機にもかかわらずエラスムスプログラムによる留学生数は増加

欧州における財政危機にもかかわらず、海外で学ぶドイツ人学生及び研究者は増加している。特に、インターンシップのために留学する学生や研究者の数が顕著に伸びているという結果が、ドイツ学術交流会(DAAD)が行った調査“Student and staff mobility in times of crisis”により明らかになった。

2008-2009年度から2012-2013年度にかけて、エラスムス加盟国において、留学目的で海外に滞在した学生数は毎年平均 6%伸び、16万 8,000人から 21万 2,500人に増加した。また、外国でインターンシップに参加した学生数は、毎年平均 16%増え、3万人から 5万 5,600人に増加した。

海外でのインターンシップを希望する者が顕著に増えた一因には、大学卒業後の就職のチャンスを高める機会だと考える学生が増えていることが挙げられる。

BMBF: <https://www.bmbf.de/de/mobilitaet-im-erasmus-programm-trotz-finanzkrise-weiter-steigend-452.html>
(6 Aug. 2015)

北米在住のドイツ人研究者による国際ネットワーク(GAIN)が年次総会を開催

8月28日から3日間、アメリカ・サンフランシスコにおいて、設立15年目を迎えたドイツ研究者国際ネットワーク(GAIN)※の年次総会が開催され、若手研究者を含む北米在住の500人以上のドイツ人研究者が交流する。

このGAINの年次総会は、北米に滞在しているドイツ人研究者にとって、ドイツの学術、研究、産業界のリーダーらと議論し、また、ドイツの大学や研究機関及び産業界での就職等キャリアに関する情報交換の場所となっている。

その後の追跡調査によると、GAINに参加した若手研究者の3分の2が再びドイツに帰国している。



(GAIN ホームページより)

BMBF: <https://www.bmbf.de/presse/deutsch-amerikanischer-wissensgipfel-946.html> (26 Aug. 2015)

※ドイツ研究者国際ネットワーク(GAIN): 米国で研究・教授活動に従事している約7,000人のドイツ人研究者にとって、GAINは重要なネットワークの基点になっている。キャリアに関する情報提供だけでなく、長期的に米国の研究システムで研究するドイツ人研究者とコンタクトを取ったり、協力関係を築くためのプラットフォームにもなっている。(日本学術振興会海外センターレポート「ドイツの高等教育機関」より要約)

連邦政府が学問有期契約法の改正を決議

連邦政府は、ドイツの若手研究者の雇用条件を改善するため、学問有期契約法の改正に関する草案を閣議決定した。これにより、大学・研究機関における不適切な短期契約が禁止されることになる。

主な改正点は以下のとおり。

- ・被雇用者が資格取得(博士号取得等)を目指す場合のみ、正当事由なしの有期雇用を認め、資格取得を目指すない被雇用者に対して契約期間を定めることは禁止される。
- ・被雇用者が資格取得(博士号取得等)を目指すための有期雇用に関しては、契約期間は資格取得に適した期間であること。
- ・外部資金による雇用の場合、雇用期間はその外部資金が認められている期間に相当すること。

BMBF: <https://www.bmbf.de/presse/bessere-bedingungen-fuer-den-wissenschaftlichen-nachwuchs-1049.html>
(2 Sep. 2015)

トピックス イベント報告

ポーランドの学術機関との連携強化に向けてワルシャワを訪問

日程：2015年8月19日(水)～21日(金)

ボン研究連絡センターは、日本とポーランド間の学術連携の強化に向けて、8月19日から21日にかけてワルシャワの学術振興機関及び研究機関等を訪問した。

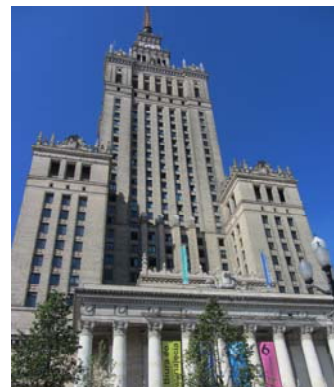
本会の長年のパートナー機関であるポーランド科学アカデミーでは、Prof. Czuczwar 副会長らと二国間交流事業の現状や、外国人特別研究員の推薦方法等について意見を交わし、引き続きの連携強化に努めることで合意した。また、ポーランド科学アカデミー傘下の研究機関と大学との関係等、ポーランドの学術事情について情報収集する機会に恵まれた。

また、ポーランド国内の新たなファンディング機関として2007年に設立されたポーランド国立研究開発センターを訪問し、Prof. Katcki 副センター長から同センターの設立経緯、概要及び助成方針等について説明を受けた。同センターは、戦略的重点分野として7つの学術分野にターゲットを絞って研究資金を助成しており、現在11か国の学術振興機関と二国間交流に関する覚書を交わして積極的に国際連携を進めている。ポーランドを含むヴィシェグラード4か国(V4)及び日本との間の対話・協力のための合意がなされて以降は、日本を含む多国籍間の研究プロジェクトに対する助成も担当している旨の説明があり、本会との連携可能性を含め、日本との学術交流への高い関心が示された。

続いて、原子力化学技術研究所やポーランド科学アカデミー物理化学研究所において、本会のフェロースhipプログラムや共同研究支援の枠組み等に関する説明会を開催した。両研究機関とも日本との共同研究の実績があり、引き続きの研究連携に向けて、本会プログラムに対する質問が多く寄せられた。また、物理化学研究所では、二国間交流事業の共同研究プログラムに採択され、同研究所を訪問中の中田聰広島大学教授及びポーランド側の研究代表者である同研究所の Prof. Gorecki と面談し、これまでの長期に渡る共同研究の実績や現状について聴取することができた。

さらに、ポーランド科学アカデミー高圧物理学研究所を訪問し、これまでの日本との深い関わりや、窒化ガリウム(GaN)研究を通して交流のあるノーベル物理学賞受賞者、天野名古屋大学教授らとの共同研究実績等について説明を受けるとともに、同研究所内の研究設備を見学した。

また、ワルシャワ大学国際部において、同大での国際交流の現状について説明を受け、本会のフェロースhipプログラム等を紹介するとともに、同大での事業説明会の開催可能性について意見交換を行った。



ポーランド科学アカデミー本部が入る文化科学宮殿



ポーランド科学アカデミーProf. Czuczwar 副会長(中央)らを訪問



ポーランド国立研究開発センター(NCBR)Prof. Katcki 副センター長(右から2人目)らを訪問



物理化学研究所におけるJSPS 事業説明会

今回の訪問は、在日ポーランド大使館で科学アタッシュを勤めたご経験があり、ポーランド科学アカデミー物理化学研究所の Prof. Stanislaw Filepek の全面的なご支援により、短い日程にも関わらず代表的な学術振興機関及び研究機関等を訪れることができ、大変有意義な訪問となった。ここに改めて深甚の感謝を申し上げたい。

第 16 回 ドイツ語圏日本研究者会議に参加

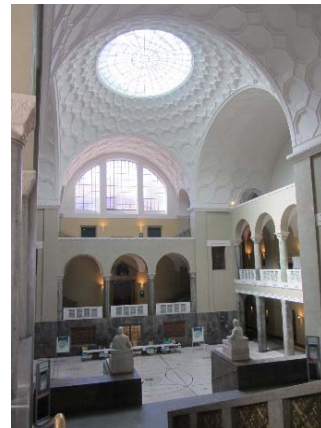
日程：2015 年 8 月 26 日(水)～28 日(金)

場所：ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン(ミュンヘン大学)
(Ludwig-Maximilians-Universität München)

8 月 26 日(水)から 28 日(金)の 3 日間にわたり、ミュンヘン大学を会場として「第 16 回ドイツ語圏日本研究者会議(主催:ドイツ語圏日本研究学会)」が開催され、本センターから 3 名の職員が参加した。本会議には、日本関係学を専門とする研究者等、ドイツ語圏各地や日本から総勢 300 名以上が集まり、主に人文社会科学分野からなるパラレルセッション等が開かれた。

8 月 27 日(木)には、大学内の講義室にて、本センターの主催で情報交換昼食会を開催した。この昼食会には、ドイツ語圏日本研究者会議に参加する元 JSPS フェローや、ミュンヘン地域で活動する日本人研究者、ミュンヘン総領事館の與謝野副領事を招待し、情報交換や同窓会活動の周知等を行った。日本人研究者との意見交換では、ミュンヘン地域における生活の立ち上げの難しさ等、若手研究者の生活の実態を伺うことができたほか、JSPS 事業や本センターの活動に対する具体的な要望が多く寄せられた。元 JSPS フェローや與謝野副領事との意見交換も盛況に終わり、全体として実りの多い昼食会となった。

また、会議開催期間を通して、メイン会場の一角に JSPS のブースを設置し、JSPS 事業や JSPS 同窓会の活動に関する情報提供を行った。本会議の参加者の中には、日本での研究活動や生活全般に関心を示す参加者もあり、ブースには熱心な質問が複数寄せられた。30℃を超える暑さが続いた真夏のミュンヘンにおいて、本会議には前回は上回る参加者が集まり、コーヒーブレイクの時間帯には日本学関係者が活発に交流している様子が見受けられるなど、盛り上がりを見せていた。



会場となった講堂



ランチレセプションの様子



ブースの様子

浅島理事がドイツ対応機関を訪問

日程：2015年9月1日(火)

JSPS Abend 出席のため来独された日本学術振興会浅島理事が、ドイツのパートナー機関等を訪問し、関係者との懇談を行った。訪問先は、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(AvH)事務総長 Aufderheide 博士、ドイツ研究振興協会(DFG)国際部長 Schneider 博士、ドイツ学術交流会(DAAD)副事務総長・ベルリン支部長 Grothus 氏及びボン大学学長 Hoch 教授である。

訪問先では、日頃の業務協力に謝辞を述べるとともに、日独の研究を取り巻く環境や現状、今後の展望等の意見交換し、日独の研究者・学生交流、共同研究事業に関して引き続き相互に協力体制を図っていきたい旨を共有した。



DFG 関係者

日本語研究者ネットワーク (JR-Net) 連絡会議を開催

日程：2015年9月2日(水)

場所：ホテルブリストル (ボン)

昨年から、ドイツで研究する日本人研究者の意見交換の場として、日本語研究者ネットワーク(JR-Net)連絡会議を開催している。今年も昨年同様、若手研究者及びドイツの大学の日本人シニア研究者を招き、意見交換を行った。

会議では、若手研究者が独自に立ち上げているネットワーク活動の紹介や、シニア研究者からのご意見等が活発に議論された。

今回の会議で出された意見や要望から、研究面のみならず生活面やネットワークにおけるサポートも求められていることが明らかとなった。在独日本人研究者のサポートもセンターとしての大きな役目であるため、今後も引き続き支援を強化していく予定である。



会議の様子

年次活動報告会 JSPS Abend を開催

日程：2015年9月2日(水)

場所：ホテルブリストル (ボン)

9月2日(水)、ドイツの学術振興機関や近隣の大学関係者等を招待し、年に一度日本学術振興会ならびにボン研究連絡センターの年次活動報告を行う JSPS Abend(アーベント)を開催した。

東京本部からも浅島理事を始め、研究協力第二課武藤特任職員、研究協力第一課近藤国際協力員の3名が参加した。

報告会は、浅島理事の挨拶から始まり、ボン大学 Hoch 学長、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団 Aufderheide 事務局長、在ドイツ連邦共和国中根特命全権大使より祝辞を賜り、Menkhausドイツ同窓会会長の乾杯で開始された。また、今回は、長年に渡って研究者交流や学術シンポジウムをはじめとする様々な日独学術交流の推進を通して、日独の相互理解及び友好親善に大いに貢献されたことに対して、外務省より小平センター長に外務大臣表彰が授与された。

夕食を囲みながらの報告会は、途中ボン出身の若手演奏家によるピアノと打楽器の演奏を挟み、和やかに進んだ。夕食後には、ドイツのマックス・プランク宇宙物理学研究所で活躍している小松英一郎所長から“Cosmic Microwave Background: Fossil of the Fireball Universe”と題した学術講演をいただいた。小松先生のダイナミックな研究内容や宇宙に関する知識をわかりやすい表現で講演していただき、参加者も大変興味深く熱心に聴講していた。

日頃 JSPS 事業でお世話になっている対応機関の担当者とも直接顔を合わせて意見交換をする機会にもなり、今後も協力関係を築く上で大変貴重な機会であった。

最後に、小平センター長の挨拶があり、今年も盛況のうちに閉会となった。



浅島理事からの挨拶



中根大使から賞状を授与される小平センター長



小松所長による学術講演

今後のイベント

11月5日(木) 渡日プログラム説明会(デュッセルドルフ)

12月9日(水)~10日(木) 日独学術コロキウム(キール)

2016年5月3日(火) サマープログラムオリエンテーション(ボン)

5月20日(金)~21日(土) 日独学術シンポジウム(オルデンブルク)



センター長コラム

9月に入って秋めいてきたが、今年のボンの夏は暑かった。難民の大規模流入とギリシャの財政再建問題で揺れ続けるヨーロッパ連合の中で、最も豊かながら困難な立場にあるドイツ連邦の暑かった夏は、まだ終わっていない。一方、ボンから眺めた日本国は、首相の8月14日終戦後70年談話が特にインパクトも無く出され、9月3日の降伏調印記念日も波風立てずに過ぎて、憲法違反問題を残したままの安保法案も成立するという、猛暑の夏が過ぎて何事も無かったかのように秋を迎えようとしているように見える。それも、空前の豪雨禍や終わりの見えない放射能汚染、それにGDPの2倍を超える国家財政負債を抱えながらである。「日本から欧州は近いが、欧州から日本は遠い」という感覚距離の違いのなせる業か。

8月に西崎副センター長とワルシャワに出かけた。ボン・センター担当国のポーランドでは、2011年から科学技術・学術支援予算の配分システムが改革されて、開発研究支援を中心とする国家基礎研究センター(NCBR:本部ワルシャワ)と人文社会系を含む一般学術研究支援を中心とする国家学術センター(NCS:本部クラカウ)が創設されて、新体制を整えつつある。従来はソ連時代から学術・科学研究の中軸であったポーランド・科学アカデミー(PAN)が国立研究所運営も予算配分も担ってきた。教育に特化していた大学が研究機能を強化するにつれ、アカデミーは傘下研究所の運営に特化し、より広い範囲を対象とする支援資金配分機関が新設された。JSPSは1974年にPANと協定を結び交流事業を行ってきていて、そろそろ協定相手の変更が必要ではないかと思われた。短い訪問を通して、今のポーランドは非常に親日的であり、また、ヨーロッパ志向が強いのが感じた。

ここ数年に訪れたウクライナ、トルコ、ポーランドといった広大な国土を有するドイツ周辺諸国では、かつての日本のスローガンであった「富国(強兵)」に依然重きが置かれていて、研究支援にもその色彩が強いように見える。そこにきて、極東に在りながら欧米を追って比較的短い年月で成熟期を迎えてしまった日本社会は、難しい舵取りを迫られている。経済・安保優先傾斜の中で、日本の大学の「種別化・人社系見直し」の動きが、一方的に行き過ぎないかを憂慮しているのは私だけではあるまい。今夏のドイツ連邦政府の「難民受け入れ」宣言は、2011年の「脱原発」宣言に似て、一種の「思想宣言」であり、その実現への道のりにはまだまだ多くの戦略的工夫が必要となるであろう。今年の夏、日本から「思想宣言」と言えるものは何も聞こえて来なかったように思う。そもそも「思想宣言」というような硬い概念文化は非常にドイツ的なものなのかも知れない。

木々が色づき始めたボンで、日本社会が固有の文化的・地勢的特質をも活かしながら発展することを願いつつ、自分がなすべきことは何かと問い直している。

(小平桂一 2015.09.28.)

ドイツの大学紹介:ミュンヘン大学

今回ご紹介するのは、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン(ミュンヘン大学)である。50,000人近い学生数を誇るバイエルン州立の総合大学で、文系から理学・医学系まで、全18学部で構成されている(工学系は、近隣のミュンヘン工科大学が担っている)。

エクセレンス・イニシアティブ注においても、エリート大学として3期続けて選出されるなど、ドイツ有数のトップ大学として有名で、14名のノーベル賞受賞者等、多くの著名人を輩出している。

大学としての歴史は古く、1472年にはその前身が創立され、1802年からは現在の名称となった。また、第二次世界大戦中には、反ナチス運動「白バラ」の活動拠点となり、中心メンバーのショル兄弟がピラをまきゲシュタポに捕えられた舞台としても知られ、大学のメインホールにある白バラ記念館には、国内外から多くの人が訪れている。



大学のメインビルディング

《参考:世界大学ランキング順位》

-Times Higher Education 世界大学ランキング (2015-2016):29位

<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/ludwig-maximilians-universitat-munchen?ranking-dataset=133819>

-QS 世界大学ランキング (2015-2016):75位

-QS 分野別ランキング(2015-2016) 物理・天文学分野:13位

<http://www.topuniversities.com/universities/ludwig-maximilians-universit%C3%A4t-m%C3%BCnchen#subject>

注:エクセレンス・イニシアティブ:ドイツの学術研究を強化して国際競争力を向上させるために創設された大規模プログラム。①大学院設立構想、②研究拠点設立構想、③大学の将来構想(エリート大学)の3つのプログラムがあり、③に選出されることはエリート大学の証明とも言える。http://www.dfg.de/en/research_funding/programmes/excellence_initiative/



オフィス前の紅葉した木々(左)とワイン祭での演奏(右)

ドイツの秋

ドイツも紅葉の時期を迎え、ボンセンター周辺の木々も赤や黄色に染まっています。スーパーにも秋の味覚であるきのこやリンゴが店頭に並び始めました。また、この時期はワイン原料のブドウの収穫時期でもあり、各地ではワイン祭が開催され、地元ならではのおいしいワインを楽しむことができます。ドイツはビールと思われがちですが、意外とワインの消費量も多いのです。(田尾国際協力員)



JSPS Bonn Office
日本学術振興会ボン研究連絡センター



日本学術振興会ボン研究連絡センター

JSPS Bonn Office

Wissenschaftszentrum

Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn (事務所住所)

Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn (郵便物用)

Tel. +49(0)228-375050

Fax +49(0)228-957777

www.jsp-s-bonn.de